

大学院派遣研修報告書

所属校	東京都立武蔵丘高等学校	氏名	木村 英憲
派遣大学院	鳴門教育大学大学院	専攻・コース	教科・領域教育専攻 芸術系(美術)コース
研究テーマ	鑑賞活動と表現活動をつなぐ教材研究 — 高校生の視点に立った、表現活動と連携する鑑賞教材の開発 —		

I 研究の概要

本研究では、実技研究と論文研究を通して、高等学校美術教育における鑑賞活動と表現活動の連携について考察を深めた。

【実技研究】

美術作品鑑賞を活かした実技研究を通じて、鑑賞活動と表現活動の連携について探究した。様々な作家の主題や表現形式、技法を分析すると共に、作家が主題を形象化する方法論について考察し、絵画制作に活用した。論文研究内容を実技により体験的に検証し、実技研究内容を論文研究の基礎資料とすることで、表現活動の実態に即した実践的な鑑賞教材の開発につなげることができた。

【論文研究】

1. 研究の目的

高等学校美術において、生徒が自分なりの見方で主体的に鑑賞活動に取り組むために、生徒の視点に立った、表現活動と連携する鑑賞教材を開発することを研究の目的とした。

生徒が主体的に鑑賞活動に取り組むためには、生徒が意欲、関心をもって美術作品と接することが必要となる。本研究の一つのねらいは、生徒が意欲、関心をもって主体的に鑑賞活動を行うために、どのような鑑賞作品を取り上げればよいのかを明らかにし、高校生の特性に応じた鑑賞作品を選定することにある。

生徒が自分なりの見方で鑑賞するには、生徒が自分の力で考える鑑賞指導の方法と仕組みが必要となる。そのための一つの方法として、美術作品の理解を鑑賞活動で十分深めた上で、自分なりの解釈を加えて表現活動を行い、体験的な理解を重ねることが効果的であると考えられる。本研究のもう一つのねらいは、生徒が自分なりの見方で鑑賞するために、鑑賞活動と表現活動の連携した鑑賞教材を開発することである。

鑑賞教材の開発を通して、鑑賞を一層重視し、鑑賞と表現の連携を深めた美術教育の展望を図ることを意図した。

2. 高校生の特性に応じた鑑賞作品

第2章では、高校生の特性に応じた鑑賞作品を明らかにした。

(1) 高校生の特性

生徒が意欲、関心をもって鑑賞活動に取り組むためには、生徒自身の特性や関心を把握する必要がある。教育現場で接する高校生の現状を踏まえ、高校生の心理や行動に関する文献研究に基づき、高校生の特性を分類し考察した。分類は高校生の内面を出発点として外界へと広がっていく高校生の関心(世界)に沿って、「自己像の模索」、「身体の意識化」、「身の周りの世界の再認識」、「現代社会からの影響」、「社会・歴史とつながる意識」の5つの大きな分類と計15の項目に整理した。

高校の青年期では、自分自身を真しに見つめる中で、自分に自信を失ったり、強い不安感を持ったりする傾向が強い。大人以上にストレスを抱えている高校生は、癒しに対する強い欲求を持っている。そのような「自己像の模索」を行う高校生の特性を、「自分を見つめる」、「自己像の揺れ」、「不安と幻影の発生」、「癒しの欲求」の4つの項目にまとめ考察した。

高校生の身体は大人のものへと変化を遂げ、自分の身体に対するこだわりや、性への関心が高まり、わき上がる身体的エネルギーを感じる時期である。「身体の意識化」が生じる高校

生の特性を「身体へのこだわり」、「性への関心」、「わき上がる身体的エネルギー」の3つの項目にまとめ考察した。

また高校生の時期は、生活空間が広がり変化していく時期であり、地域や環境に対する意識も高くなる。人間関係も広がり、周囲との新たな関係を築く時期である。「身の周りの世界の再認識」を行う高校生の特性を、「目の前の世界を見つめる」、「地域や環境の意識化」、「人間関係の広がり」の3つの項目にまとめ考察した。

生活環境としては、マスメディアを通じた娯楽文化や、購買意欲をくすぐる大量消費文化の中で育ち、過剰な情報が激しく行き交う高度情報化社会に生きている。そのような「現代社会からの影響」を受ける高校生の特性を、「娯楽文化との関わり」、「消費社会での購買欲求」、「情報化社会での表現とコミュニケーションの変化」の3つの項目にまとめ考察した。

さらに高校生は政治や社会的枠組みに対しても意識的になり、歴史認識も深まっていく時期にある。「社会・歴史とつながる意識」が高まる高校生の特性を、「政治・社会的意識の高まり」、「歴史・文化への帰属意識」の2つの項目にまとめ考察した。

(2) 高校生の特性に応じた鑑賞作品の想定と調査

高校生の特性の分類を基に、各特性項目と関連が深いと想定される美術作品を、主に現行高校美術教科書の中から検討し、50作品を取り上げた。取り上げた美術作品の妥当性に関し、所属校の美術選択生徒(1~3学年全149名)を対象として、美術作品から受け取る内容と関心についてアンケート調査を実施した。想定した50の作品それぞれに対し、関心度(最低1~最高4)と感じ取られる内容項目(高校生の特性項目に対応する16項目)を選択回答する調査内容である。

調査結果について、50の作品ごとに各関心度の割合、関心度の平均、各内容項目の割合を集計分析した。集計結果を基に、関心度の高い作品、低い作品、想定した内容項目への選択率の高かった作品、低かった作品について考察した。メディアアートや幻想的な作品への関心度が高かった反面、印象の暗い肖像画や漫画的キャラクターを扱った作品への関心度が低かった。関心度が低いから鑑賞題材として取り上げないのではなく、生徒の関心を十分認識した上で、高校生の特性に応じた視点や生徒の気付いていない視点から作品の魅力に出会わせる指導が必要であると考えた。

(3) 高校生の特性に応じた鑑賞作品の選定

調査結果の分析と考察から、特性項目ごとに選択率の高かった作品を中心に、高校生の各特性項目に対応した鑑賞作品を42作品選定した。選定作品は以下の通りである。

- ①「自分を見つめる」：レンブラント《自画像》など3作品
- ②「自己像の揺れ」：佐伯祐三《立てる自画像》など2作品
- ③「不安と幻影の発生」：横尾忠則《運命》など4作品
- ④「癒しの欲求」：モネ《睡蓮》など5作品
- ⑤「身体へのこだわり」：ロン・ムエック《無題(少年)》など3作品
- ⑥「性への関心」：クリムト《接吻》
- ⑦「わき上がる身体的エネルギー」：亀倉雄策《東京オリンピックポスター》など2作品
- ⑧「身の周りの世界の再認識」：小林孝亘《D i s h (w i t h f o r k & s p o o n) 》
など3作品
- ⑨「地域や環境の意識化」：エステス《オランダ・ホテル》など3作品
- ⑩「人間関係の広がり」：ホイッスラー《画家の母親》など3作品
- ⑪「現代社会からの影響」：リキテンスタイン《ごらん、ミッキー》など3作品
- ⑫「消費社会での購買欲求」：サイトウ・マコト《アルファー・キュービク》など2作品
- ⑬「情報化社会での表現とコミュニケーションの変化」：m i n i m + + 《K A G E 》など
3作品
- ⑭「政治・社会的意識の高まり」：ピカソ《ゲルニカ》など2作品
- ⑮「歴史・文化への帰属意識」：アジャンター石窟寺院《蓮華手菩薩像》など3作品

鑑賞作品の選定によって、鑑賞活動で特定の美術作品を取り上げる教育的意義を、生徒の視点から示すことができた。

3. 鑑賞教材開発の視点

第3章では、高校生の特性を踏まえ、表現活動と連携する鑑賞教材開発の視点を考察した。高校生の特性を踏まえた鑑賞教材としては、高校生の特性をテーマとし、作品を通じてその特性を深く探求する方法がある。また高校生の特性を、作品のほかの要素と絡ませながら授業展開する方法や、高校生の特性を導入として活用する方法もある。

表現活動と連携した鑑賞教材としては、単に鑑賞活動で得た知識を表現活動に利用するのではなく、鑑賞した内容を自分なりに解釈して表現することが重要である。鑑賞活動での学習内容を、表現活動において自分なりに解釈して活用する鑑賞教材によって、鑑賞内容の理解は深まり、学習成果が定着する。それは、表現することによってもう一度、身をもって鑑賞する「表現による体験的な鑑賞」ともいえる。

生徒が自分なりの解釈で表現するためには、鑑賞活動の中で作品の意図と方法論を十分に理解しておく必要がある。制作プロセスや作品の変遷といった作品の形成過程を鑑賞することで、作品の意図や方法論はより理解しやすくなる。作品の形成過程を鑑賞することで、鑑賞内容を自分の表現に活用する具体的な方法論を学ぶことができる。

4. 鑑賞教材の開発 —「癒しの欲求」に対応した鑑賞作品を題材に—

第4章では、高校生の「癒しの欲求」の特性に対応した鑑賞作品に選定したマティス《夢》とモネ《睡蓮》を題材に、表現活動と連携した鑑賞教材を開発した。

(1) 制作プロセスに焦点を当てた鑑賞教材 —マティス《夢》を題材に—

① 作品研究

マティス《夢》(1940年)には日付の入った14枚の制作プロセスの記録写真が残されている。《夢》の制作プロセスを題材に、文献研究を基に作品の主題と表現形式や方法論について作品研究を行った。《夢》の制作プロセスの記録には、紆余曲折しながら自己の意図をまとめ表す、マティスの方法論が垣間見られる。マティスは1年弱にわたる《夢》の制作において、モデルを前にした感覚を、試行錯誤しながら表現形式へと変換し、主題と表現形式の照合を繰り返していた。

② 鑑賞授業の構想

作品研究を踏まえ鑑賞授業では、《夢》の制作プロセスを追いながら、生徒との対話形式で作家の意図する主題と表現形式を読み解いていく流れを構想した。制作プロセスの各段階の変化を観察していく中で、マティスの方法論とともに、《夢》に見られる様々な表現の特徴について鑑賞する内容である。その表現の特徴とはモデルに対する親密感、形態の柔らかなふくらみ、広がりのある平面性、簡素で研ぎ澄まされた形態や色彩、薄塗りや輪郭線の軽快感、静謐と安らぎを感じさせる造形要素の諸調和などである。マティスは見る人に癒しの感覚を与えるために、これら表現の特徴を探究し試行錯誤を繰り返したが、完成作品では努力の痕跡を消し去り澄みきった状態に到達していることを確認する。

③ 鑑賞授業と連携した実技授業の構想

鑑賞授業の後に展開される実技授業では、鑑賞授業での学習成果を踏まえ、作家の表現を自分なりに解釈して活用し、鑑賞作品への理解を体験的に深める展開を構想した。鑑賞授業で考察した「広がりのある平面性」、「シンプルでラフ」、「穏やかな調和」の3つの表現の特徴のうち1つをテーマとして選択し、油彩静物画を制作する内容である。制作において生徒は、鑑賞活動を振り返ってマティスの表現の特徴を確認し、自分なりにどう活用するのか捉え直すことが必要になる。静物モチーフはマティス《マグノリアのある静物》に類似したものとし、生徒作品の完成後に《マグノリアのある静物》の制作プロセスの記録を概観する。生徒自身の制作プロセスと比較することで、マティスの方法論に対する一層の理解を進めることを意図している。生徒作品の制作プロセスも記録に撮り、作品完成後に完成作品と共に皆に提示する。生徒の制作プロセスを追いながら、各自が追求したマティスの表現についてプレゼンテーションさせることで、各自の方法論に対する認識を深めさせることとした。

(2) 作品の変遷に焦点を当てた鑑賞教材 —モネ《睡蓮》を題材に—

① 作品研究

モネによる《睡蓮》の連作は1897年から始まり、1926年のモネの死の直前まで約30年間制作が続けられた。250点を越える《睡蓮》連作の中から、年代に沿って8点の作品

を取り上げ、文献研究を基に作品の主題と表現形式や方法論について作品研究を行った。《睡蓮》連作の一貫したテーマは、睡蓮の池に満ち溢れる光の追求であった。連作を通じてモネは、常に変化する水面の光に徐々に集中し、その光を心の目で感じ自らを包み込む世界として表現していった。連作の変遷からは、主題を掘り下げて深化し、表現形式を先鋭化していったモネの探究の激しさを読み取ることができた。

②鑑賞授業の構想

作品研究を踏まえ鑑賞授業では、《睡蓮》連作の変遷を追いながら、生徒との対話形式で作家の意図する主題と表現形式を読み解いていく流れを構想した。制作年による作品の変化を観察していく中で、主題の深化や表現の特徴について鑑賞する内容である。表現の特徴として、筆触分割による色彩の響き合いや荒々しい筆触、形態の曖昧さ、多層的な空間表現を取り上げ、主題との関連を読み取っていく。作品に感じられる癒しの感覚の裏には、モネが晩年白内障や家族の不幸に見舞われながらも、大作に果敢に挑み続けたのたうち回るような試行錯誤があることを確認する。

③鑑賞授業と連携した実技授業の構想

鑑賞授業の後に展開される実技授業では、鑑賞授業での学習成果を踏まえ、「私を包む光」をテーマに、校内風景画を制作する展開を構想した。鑑賞活動を振り返ってモネのとらえた光を確認し、モネの表現も参考としながら自分なりの光を意識化して表現する内容である。校内の同一場所で3枚のアクリル画を各2、4、6時間で制作し、作品完成後に皆に提示する。生徒自身の連作の制作を通して、どのような主題と表現形式を意図したのかプレゼンテーションさせることで、各自の方法論に対する認識を深めさせることを意図した。

5. 様々な鑑賞教材とカリキュラムの展望

第5章では、高校生の特性に応じた様々な鑑賞教材例と、鑑賞教材によって編成された美術のカリキュラム案を提示した。

鑑賞教材例として、鑑賞オリエンテーションのほか、一つの高校生の特性をテーマとした鑑賞教材、複数の高校生の特性を関連付けた鑑賞教材、高校生の特性を導入とした鑑賞教材の例を挙げた。鑑賞を軸としたカリキュラムでは、それら鑑賞教材だけを用いて、高校生の特性に沿った各学年のカリキュラムを提案した。そのことによって、授業に鑑賞活動を取り入れる具体的な方策と、鑑賞に重点を置いた美術教育の展望を示した。

本研究では、鑑賞作品の選定に始まり、鑑賞教材による年間カリキュラムの編成に至るまで、鑑賞活動を指導する一貫した流れを、実践に即して示すことができた。

II 学校等における研修成果の活用計画

開発した鑑賞教材を用いて、帰任後早期に授業実践を行う計画である。実践に当たっては、鑑賞授業における生徒との対話の在り方や、評価方法を工夫し、鑑賞教材の有効性を検証すべく授業実践研究を進める。

本研究での教材開発は、マティス《夢》とモネ《睡蓮》を題材とした二つの鑑賞教材を中心としたものであった。さらに高校生の視点に立った、表現活動と連携した鑑賞教材に関して、順次開発を進め実践を重ねる。

また、所属校での研究紀要執筆や研究授業の実施、東京都高等学校美術工芸研究会や美術科教育学会など研究団体での発表を通して、研究の成果を広め鑑賞教育の活性化を図る。

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	都立つばさ総合高等学校	氏 名	木村 英憲
派遣大学院	鳴門教育大学大学院	専攻・コース	教科・領域教育専攻 芸術系（美術）コース
研究主題	鑑賞活動と表現活動をつなぐ教材研究 —高校生の視点に立った、表現活動と連携する鑑賞教材の開発—		
1	<p>研究の中で開発した鑑賞教材の有効性を検証し、学習効果の高い教材に改善していくために、授業実践を継続して行っている。</p> <p>本年度は、「高校生の関心に応じた鑑賞オリエンテーション」、「制作プロセスに焦点を当てた鑑賞教材 —マティス《夢》を題材に—」、「作品の変遷に焦点を当てた鑑賞教材 —モネ《睡蓮》を題材に—」の3種類の鑑賞教材による授業を実践している。そのうち「作品の変遷に焦点を当てた鑑賞教材 —モネ《睡蓮》を題材に—」では、授業展開や対象学年などの条件を変えて4講座で検証授業を行っている。</p> <p>授業実践の内容に関しては、「3 成果を生かした研究授業等」に記載する。10月現在、授業実践は展開途中であるが、概ね生徒は鑑賞活動に対して意欲と関心を示し、鑑賞活動の成果を自分なりに表現活動に結び付けようとする姿勢が見られる。本年度の授業実践終了後に結果を十分に分析、考察し校内外へ発表を行いたい。</p>		
2	<p>委員会・研修会での成果活用</p> <p>本年度実施している授業実践研究を踏まえ、来年度学会等で発表する予定である。</p>		
3	<p>派遣研修で開発した鑑賞教材を用いた、本年度の授業実践は以下のとおりである。</p> <p>1. 高校生の関心に応じた鑑賞オリエンテーション</p> <p>(1) 講座：芸術科美術Ⅰ 1年1・2組 24名</p> <p>(2) 日時：平成18年4月17日6時間目、24日5時間目（全2時間）</p> <p>(3) 学習の主なねらい：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に美術作品に接し、作品の良さを分析する態度を養う。 ・ほかの生徒の作品の見方を知り、様々な鑑賞の視点を理解する。 <p>(4) 学習内容概要：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・配布プリントに掲載された50の美術作品のなかから、各自気に入った作品を選んでグループを作り、作品の魅力と、魅力の原因を話し合った。最後にグループごとに、話し合いの内容を発表した。 <p>2. 制作プロセスに焦点を当てた鑑賞教材 —マティス《夢》を題材に—</p> <p>(1) 講座：美術科絵画Ⅱ 3年 12名</p> <p>(2) 日時：平成18年5月30日～8月30日（週4時間、全26時間）</p> <p>(3) 学習の主なねらい：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞活動では、マティスが《夢》の制作を通して何を表現しようとしていたのか、主題と表現形式の両面から理解を深め、制作における試行錯誤の重要性を理解する。 ・表現活動では、マティスが制作プロセスのなかで追求したものを体験的に理解し、自分なりの解釈で表現し、意識的に試行錯誤する制作を展開する。 <p>(4) 学習内容概要：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マティス《夢》には14枚の制作プロセスの記録写真が残されている。鑑賞活動では、3時間で、制作順に制作プロセスの主題と表現形式について鑑賞した。制作プロセスを通して、制作の方向性や作家の意図について考察し、作家が追求した内容を分析、整理した。 		

<p>3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業 等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞活動ではマティスの特徴として「広がり」、「シンプル」、「穏やかさ」があることを考察した。3つの特徴のなかから各自一つをテーマとして選び、人物モデルを4時間で木炭素描した。 ・更に同テーマで、人物モデルを16時間で油彩表現した。画面の大きさはF12～15号とした。制作中は毎授業終了時に、各自の制作プロセスを写真で記録した。 ・作品完成後、各自の制作プロセスの記録と完成作品を基に、制作の構想や意図についてプレゼンテーションした。 <p>3. 作品の変遷に焦点を当てた鑑賞教材 —モネ《睡蓮》を題材に—</p> <p>(1) 講座：芸術科美術Ⅰ 1年1・2組 24名、3・4組 26名、5・6組 19名 美術科絵画Ⅱ 3年 12名</p> <p>(2) 日時：1年1・2組 平成18年10月16日～12月18日（週2時間、全18時間）予定 1年3・4組 平成18年9月15日～11月17日（週2時間、全16時間）予定 1年5・6組 平成18年6月22日～8月21日（週2時間、全15時間） 3年 平成18年8月30日～10月24日（週4時間、全21時間）予定</p> <p>(3) 学習の主なねらい：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞活動では、モネが《睡蓮》の制作を通して何を表現しようとしていたのか、主題と表現形式の両面から理解を深め、作品を展開していく過程の重要性を理解する。 ・表現活動では、モネが連作の展開のなかで追求したものを体験的に理解し、自分なりの解釈で表現し、意識的に試行錯誤する制作を展開する。 <p>(4) 学習内容概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・《睡蓮》連作はモネの死の直前まで、約30年にわたって制作が続けられた。1年1・2組美術Ⅰと3年絵画Ⅱの鑑賞活動では、2時間で、制作順に各作品の主題と表現形式について鑑賞する。連作の変遷を通して、制作の方向性や表現方法について考察し、作家が追求した内容を分析、整理する。 ・鑑賞活動では、モネが《睡蓮》連作を通して、水面の光のきらめきに包まれる主観的な世界にたどり着いたことを考察した。表現活動では、「私を包む光」をテーマに学校敷地内の屋外風景画を制作する。モネが連作を通じて作品を展開したことを踏まえて、複数の作品制作を通して、各自の考える光を追求する。2時間、4時間でB3水彩画を各1枚、その後、1年1・2組美術Ⅰでは6時間でB3水彩画1枚、3年絵画Ⅱでは10時間でF12～15号油彩画1枚を制作する。 ・1年3・4組美術Ⅰでは、鑑賞活動を行わず、「私を包む光」のテーマで3枚の水彩画を描き、1年5・6組では同じく鑑賞活動を行わず、12時間で1枚の水彩画を描く。条件の違いにより教材の学習効果を検証する。
<p>4 今 後 の 活 用 計 画</p>	<p>「作品の変遷に焦点を当てた鑑賞教材 —モネ《睡蓮》を題材に—」に関する授業実践研究の考察をまとめ、本年度の所属校研究紀要に執筆する予定である。</p> <p>また、「制作プロセスに焦点を当てた鑑賞教材 —マティス《夢》を題材に—」に関しては、来年度、授業展開や対象学年を変えて2講座で実践を行う計画である。教材改善に向け詳細な検証を重ねたい。</p> <p>平行して新たな鑑賞教材の開発にも取り組み、研究成果の発表を継続していきたい。</p>